

# 創刊の辞

放送大学教授 柏倉康夫

放送大学は、平成 14 年度に大学院修士課程の第 1 回入学者 500 余名を迎え入れた。それから 2 年、私が主催するゼミナール「情報化社会研究」に所属した人たちは、修士論文を書き上げて修士号を得た。事実経過は以上のようなものだが、この 2 年間の努力は並大抵のことではなかった。

放送大学修士課程の学生の多くは、職場の第一線で活動している社会人である。いきおい研究と論文執筆は、仕事から戻った深夜かウィークエンドに限られる。この少ない時間のなかで、みなは新しい資料を発掘するためにフィールドワークを行い、資料を蒐集し、新しい知見を得るべく思索を重ねたのである。その成果がここに収録した 9 篇の論文に結実した。

「情報化社会研究」に集まった人たちの関心は多岐にわたるが、そこには共通した問題意識があった。それはフランスの思想家レジス・ドブレが「メディアロジー」と名づけた視点である。ドブレは著書の『一般メディアロジー講義』のなかで、こう述べている。

「メディアロジーは、従来の歴史学や社会学が放置してきた、私たちの知識の隙間をいくつか埋めること以外に主張することはない・・・〈メディアロジー〉という時の〈メディア〉は、第一にあげるべき近似的意味として、技術的・社会的に規定された〈表象の伝達・流通手段の全体〉を指す。その全体とは、印刷やエレクトロニクスなど、大量配布の手段と見なされている同時代的なメディア（新聞、ラジオ、テレビ、映画、広告など）の領域に先立ち、またそれからみ出るものである。・・・食卓、教育制度、カフェ、教会の説教壇、図書館、インク壺、タイプライター、集積回路、ナイトクラブ、議会などは、〈情報の伝達〉のために作られたものではない。それらは〈メディア〉ではない。しかしそれらは伝達の場所、争点、あるいは感覚の担い手、社会性の母体として、メディアロジーという場に関わってくるのである。なにがしの経路がなければ、〈イデオロギー〉は私たちが認知できるような社会的な存在とはなり得ないのだ。」

私たちの関心は、情報の内容とともに、その流通経路や流通システムにあった。当然のことながら、私たちの思想はなんらかの手段・媒介によって表現されない限り、他者へ伝わることはない。思想は文字、書物、ラジオ、テレビ、あるいはさまざまな装置を通して伝達されるのだから、私たちは人間の思想を、内容だけでなく媒体とともに考察しようとするのである。

現代社会の状況を情報の観点から分析する上で、もう一つ逸することができない事柄が

ある。それは権力や権利の視点であって、象徴活動の媒体や伝達作用を考えると、その媒体を誰が所有し、あるいは所有していないか、誰が利用し、利用できないかが決定的に重要である。思想はいかなる媒体によって力となるかが、絶えず問われなくてはならない。

この論文集に収められた論文のテーマは、図書館が生み出す学術情報の格差、コンピュータ出現以前のデータベースといえる大宅文庫の構築過程、明治初期の通信網の発展の政治的影響、幕末・明治に存在した読書ネットワーク、国の文化政策と地方都市金沢における工芸の変容、テレビ受容の地域間格差と放送政策、コンピュータ時代の新聞制作、情報格差解消のための提言、そしてフランスにおける科学技術の特徴と多彩をきわめる。その上、どの論文も著者の実生活における経験を基礎に発想されており、地に足が着いたものとなっている。この点が大きな特徴であり強みであることは、ご一読いただければ納得されるであろう。

私たちのゼミナールでは、これら論文の一部をネット上に公開しているが、この度、みなさんの総意でこのような形の論文集をつくることになった。好学の士にお読みいただき、ご意見を賜れば幸いである。論文集が第2号、第3号と続くことを願ってやまない。